

北タイ班

北タイ班の活動

池谷和信（国立民族学博物館）

1 背景・目的

北タイ班の研究では、北タイの山地地域を対象にして、狩猟採集民と焼畑農耕民における資源利用の生態史の変容を把握することから、アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の一般モデルの構築に寄与することをねらいとした。

北タイには、アカ、リス、モン、ミエン（ヤオ）、ラフ、ムラブリなどの山地民がよく知られている。しかし、本プロジェクトでは、先行研究の多いチェンマイ県やチェンライ県をさけて、先行研究の多くないパヤオ県やナン県を調査地として選定した。その主な対象は、焼畑農耕民ミエン（吉野担当、増野担当）とモン（中井担当）および狩猟採集民ムラブリ（池谷担当）などである。また、地域生態史を把握するための時代的枠組みとして、おのおのの山地民の自立性が高かったと推定される1960年代以前、山地民の変容期である1970年代から1990年代、そして2000年代の3つの期間に便宜的に分けて考えてみることにした。これらの時代設定が、どこまで各地域において有効であるのか否かという問題意識を、各分担者が共有化するように努めた。

2 平成17年度の活動

上述の目的のもとに、昨年度に引き続き、池谷と増野の2人は、ナン県のムラブリとパヤオ県のミエン（ヤオ）の現地調査を行った。その結果、池谷は、これまで先行研究の多くないミエンの狩猟活動について基礎資料を入手することができた。現在、タイにおいて地域住民を無視した形での自然保護の思想が広まっており、人間の存在を前提とした自然保護論を受け付けていない。しかし、ミエンの狩猟に関する基礎資料は、狩猟の持続的利用のメカニズムを考えるヒントがあり、人間の存在があっても自然は守れるのであるということを証明することになるであろう。同時に、文献資料を渉猟することから、ムラブリとモンとの関係の歴史の変遷をさらに展望した。また、ミエンもムラブリも現地での古老からの聞き取り調査も緊急におこなう必要があり、ミエンやムラブリの歴史を正確に記録に残す作業が必要になると思われる。

その一方で、増野は、昨年に引き続いて、GPSによる簡易測量と畑の利用歴に関わる聞き取り調査から、1960年代から現在までの土地利用の歴史を復元している。そこでは、村の中心的生業である焼畑の持続、変容、消滅の過程が描かれており、その変化の背景になる要因が分析されている。その結果、ヤオの山村における土地利用の変遷、土地の利用権の変遷、森林局の政策と地域住民の対応過程が詳細に描かれている。同時に、平成17年度では、ミエンの農耕のみならずブタ飼育に対象を拡大して、その詳細な報告を行なった。ブタの入手方法、生殖管理や去勢の方法などのブタの育成、焼畑同様に家畜飼育に関するミエンに関する基礎資料を整備した。

そして、平成17年度より新たに2人のメンバーが加わることで、北タイ班の調査・研究がパワーアップをした。吉野は、1980年代以降現在まで長期にわたってミエンの研究をしている社会人類学者であり、わが国におけるミエン研究の第一人者でもある。彼は、1980年代終わりにミエンの焼畑耕作の調査をしており、その成果と現在の常畑耕作の調査によって、焼畑から常畑への移行に伴う変化を詳細に記述・分析をしている。彼は、ミエン社会のなかでパイ・コンと呼ばれる労働交換に注目して、焼畑から常畑への変化はパイ・コンには直接影響をしていないという興味深い結論を見いだしている。

最後に中井は、ナン県を池谷と広くまわることで、モンの調査地を選定した。モンも、ミエンと同様に焼畑農耕民であり、中国南部からベトナム、ラオスなどをへて移住してきた人びとである。彼は、モン文化のなかでブタ飼育に注目して、ブタの飼育技術ほかブタとヒトとの多面的な関わりを明らかにした。その成果の一部は、豊富な図表とともに本稿に掲載されている。

以上のように、北タイ班では、4人のメンバーが、それぞれの4つの調査地を対象にして研究をすすめてきて

いる。今後は、4地域の地域生態史的比較が必要である。まず、4つの調査地は、タイ北部の山地という類似の環境からなり、ラオス国境に近い位置特性を持っている。また、国立公園のような保護区の周辺に立地している。今後は、ミエンやモンやムラブリなどのこの地域への移住史の復元から、彼らが山地や平地に暮らす近隣民族とどのように共生関係を築いてきたのか、その後の変容過程はどうであるのか、地域生態史のアプローチから把握することができるであろう。